

年間第 33 主日 2022.11.13 (2016.11.13 の再録)

終末のしるし

ルカ 21 章 5-19 節

ある人たちが、神殿が見事な石と奉納物で飾られていることを話していると、イエスは言われた。「あなたがたはこれらの物に見とれているが、一つの石も崩されずに他の石の上に残ることのない日がある。」そこで、彼らはイエスに尋ねた。「先生、では、そのことはいつ起こるのですか。また、そのことが起こるときには、どんな徴があるのですか。」イエスは言われた。「惑わされないように気をつけなさい。わたしの名を名乗る者が大勢現れ、『わたしがそれだ』とか、『時が近づいた』とか言うが、ついて行ってはならない。戦争とか暴動のことを聞いても、おびえてはならない。こういうことがまず起こるに決まっているが、世の終わりはすぐには来ないからである。」そして更に、言われた。「民は民に、国は国に敵対して立ち上がる。そして、大きな地震があり、方々に飢饉や疫病が起こり、恐ろしい現象や著しい徴が天に現れる。しかし、これらのことがすべて起こる前に、人々はあなたがたに手を下して迫害し、会堂や牢に引き渡し、わたしの名のために王や総督の前に引っ張って行く。それはあなたがたにとって証しをする機会となる。だから、前もって弁明の準備をするまいと、心に決めなさい。どんな反対者でも、対抗も反論もできないような言葉と知恵を、わたしがあなたがたに授けるからである。あなたがたは親、兄弟、親族、友人にまで裏切られる。中には殺される者もいる。また、わたしの名のために、あなたがたはすべての人に憎まれる。しかし、あなたがたの髪の毛の一本も決してなくなる。忍耐によって、あなたがたは命を勝ち取りなさい。」

説教

<福音書のなかの黙示録>

きょうの福音は小黙示録とも呼ばれています。3つの福音書（マタイ、マル

コ、ルカ)が同じ構成になっています。注記に表にしましたので参照してください。マタイ、マルコは新共同訳の見出しは同じです。ルカだけが「大きな苦難」のところを「エルサレムの滅亡予告」と変更していますが内容は同じです。ルカ福音書には異邦人向けという特徴があります。ユダヤ人ではなく異邦人向けに福音を伝えるために書かれたので日本人にもわかりやすいともいわれます。その反面しばしば、ユダヤ臭さを消している、福音の中身を薄めているという印象を受けます。きょうの箇所もマルコやマタイに比べると、ところどころ非ユダヤ的な表現に変更しています。黙示録的なことばを嫌って別のおだやかな言い方に替えている、ということになります。

<わたしの見解>

わたしは黙示思想が苦手です。その理由はユダヤ教の嫌なところ、えげつないところが黙示思想にでていると感じるからです。黙示思想のいわんとしていことは「選民がさいごに勝つ」に尽きます。悪は滅び正義は勝つの選民バージョンー選ばれし者が勝利するーですが、その勝利は人間の力で得るものではなく、神の超自然的な力による勝利です。現実的に敗北し続けるイスラエルの民は最後は神の力によってユダヤ人だけが勝利する。非ユダヤ人は敗北する、これが黙示思想の根っこにあるなと感じます。もう一つの理由はオカルト的表現が多いことです。蒼ざめた馬だとか、666や14400人などの意味ありげに数字のイメージをつかうところがオカルトに感じてしまうので苦手です。それではキリスト教が黙示思想をどのように取り込んでいるのか、キリスト者はどのように黙示思想を受け入れるのか？

日本の教会で黙示録の説教を聴いたことはわたしはありません。ほとんどの礼拝では(表向きは)説教されません。あるとき韓国人留学生と雑談していたら、黙示録が好きだときいて驚いたことがあります。韓国では人気の説教題目が黙示録だそうです。そういわれるといぜん台湾人牧師のエゼキエル書の説教を聞いたことがあり、その迫力にわたしもつい興奮してしまいました。

韓国人、台湾人には現代の日本人にはない感受性があるのかなあとも思いました。

福音書の話からはそれですが、黙示録に関して言えば、キリスト教の歴史のなかでも問題の書でした。四世紀の公会議で決まったので聖書の正典に取り入れられますが、その経緯にもけっこう悶着がありました。黙示録はいらないと考えていた人たちが少なくなかったということでしょう。現代でもけっこう好き嫌いのはっきりする聖書の箇所ようです。

<預言者から黙示者へ>

ユダヤ教の歴史の中で預言から黙示に変わってくる過程が旧約聖書の中にかがえます。バビロン捕囚のあたりから、預言というより黙示のことばを語りだしているようにわたしは思えます。歴史上のイスラエルは政治的、軍事的に敗北を重ねるにつれて預言のことばに従うよりも黙示のことばで宗教的な勝利を祈る民に変容しているのではないかとおもうのです。適切な区切りかどうかは自信がありませんが、エゼキエル書以降の書物は預言書というより黙示的な要素が強いように思います。仮に黙示思想を敗北から生まれた弱者の思想であるとするなら、それは同時に非・戦争の思想でもあります。実際の戦闘になると弱いものは負けます。イスラエルは常に戦闘をおこなわない非戦の民ではありませんでしたが、戦闘に負け続けたことで非戦の思想をつちかってきたという見方もできます。イエスもまた戦闘を好まないひとりでした。

「負けるが勝ち」ということわざがあります。場合によっては、争わないで相手に勝ちを譲ったほうが自分にとって有利な結果になり、自分の勝ちに繋がるといふこと、という意味です。戦術的に負けを選ぶという意味にもとれますが、このことわざを黙示的な考え方で解釈すると戦略として負けを積極的に選ぶという意味にも感じます。

<現実>

いまの世はイエスが語った世の中からどのように変わったのでしょうか。民主主義の世の中ではこのような言い方は好まれません、実質的にアメリカの大統領は世界の王たちの中のひとりです。先週、8年ぶりに大統領（王）が変わりました。彼は福音のいう「わたしの名を名乗る者」ではないかもしれませんが、本当のところはわかりません。日本には天皇がいますが、現実的な王は首相です。そしてあいも変わらず長州（いまの言い方では山口県）権勢が支配しています。福音の語る様子はいまの現実を映し出しているようです。

戦争とか暴動のことを聞いても、おびえてはならない。こういうことがまず起こるに決まっているが、世の終わりはすぐには来ないからである。」そして更に、言われた。「民は民に、国は国に敵対して立ち上がる。そして、大きな地震があり、方々に飢饉や疫病が起こり、恐ろしい現象や著しい徴が天に現れる。（ルカ 21:10-11）

<希望>

キリスト教の希望といえ、終末における希望です。現在のキリスト教の各教派のなかで黙示思想をもとに希望を語ることは少ないようです。ヨハネ福音書で語られる「よみがえり」「永遠のいのち」をキリスト教徒の希望としているところがほとんどではないかと思えます。黙示思想をもってそれを希望とするとオカルト・原理主義だと批判の的になるでしょう。だれもハルマゲドン（最終戦争）を望みはしません。

弱者が語る時に黙示思想は平和の思想でありうるのですが、強者が黙示思想を語りだすと最終戦争の思想になる可能性があります。わたしたち一人ひとは弱くはかないものです。状況によってはそれは永遠に続く状態かもしれません。しかし、世界を見渡せばキリスト教徒であるということでもなつもない強者です。これは比喩でもなんでもなく肅々たる事実です。これをよく考え、吟味してイエスのことばを受け止めましょう。

忍耐によって、あなたがたは命を勝ち取りなさい。（ルカ 21:19）

<注記>

見出し	マルコ 13 章	マタイ 24 章	ルカ 21 章
神殿の崩壊を予告する	○	○	○
終末の徴	○	○	○
大きな苦難を予告する	○	○	×
エルサレムの滅亡を予告する	×	×	○
人の子が来る	○	○	○
いちじくの木の話	○	○	○
目を覚ましていなさい	○	○	○